

シンポジウム発表

**自然のメディアとしての芸術
——マルティン・ゼールにおける自然と芸術の関係——**

阿部 美由起（東京工芸大学非常勤講師）

本発表では、マルティン・ゼールの『自然美学』（1991）における自然と芸術の関係について、歴史的時間軸における現代という観点から、ひとつの解釈を試みる。

芸術が先か自然が先かをめぐる論争は、美学の基本的命題として、伝統的に再現＝模倣理論のもとに問われ続けてきた。ゼールはこの伝統を顧みつつも、それとは異なる仕方方で現代における両者の関係を説明している。

倫理学へと接続するゼールの自然美学では、「善き生」に至る上で、自然美が卓越した範例であることが示される。その過程として、自然の美的知覚の形式についての詳細な分析がなされ、三つの形式が呈示される。第一が観照的知覚形式、第二が照応的知覚形式、第三が想像的知覚形式である。この中で「善き生」との関係においては、第二の知覚がもっとも直接的で「実存的に」対応しており、「隠れた根本概念かもしれない」とされる。

議論の途上においては、「それは自然でなくてもよい」という文言が繰り返されるが、この文言を鵜呑みにすることはできない。「それ」とは、「善き生」がうまくいくことである。そのためには、やはり「偶然性」や「遊戯」の見出される「自由な自然」は、他に類をみない、卓越した範例なのである。

自然美が「善き生」の手本であり、第一の観照的知覚形式を基盤として、すなわち人間の自然に対する一方的な知覚の態度を基盤として、人間と自然が「直接」照応し合う第二の知覚形式によって「善き生」が実現するのであれば、芸術はお役御免といえるかもしれない。しかし、芸術の、媒体＝メディアとしての機能を「想像の舞台」とする第三の想像的知覚形式に注目し、さらに歴史的時間軸において、現代が「メディア時代」であることを加えれば、芸術こそが現代の自然の美的知覚において効果的な役割を果たせるといえる。それを裏付けるように彼は、現代においては芸術画像の空間にこそ（自然科学的認識では見えなかった）「見えないものが見えるようにする」力があることを

指摘している。

以上、ゼールにおける倫理学と接続する自然美学の特徴として、

- ・自然が人間にとって模範であることを前提とすること
- ・自然知覚における「メディア時代」という現代の特徴を採り入れていること
- ・芸術は現代において自然への盲目性から我々を解放する有効なメディアであること

という指摘を確認してみた。ここからは、改めてゼールの自然美学において、人間の「善き生」に至るためには自然も芸術も、独立して同等に優位であり、且つ相互が関係し合っていることが確認される。この関係性については、カントとの類縁性も指摘できるが、「自然の自明性の喪失」の時代にあつて、芸術はわれわれに自然を美的に経験させる効果的なメディアであることが確認されるのであり、“いま”の現実在即して両者の関係を問い直したゼールの自然美学には意義を認めることができる。